

1 2 3 4 5

6 7 8 9 10

11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

21 22 23 24 25 26 27 28 29 30

31 32 33 34 35 36 37 38 39 40

41 42 43 44 45 46 47 48 49 50

51 52 53 54 55 56 57 58 59 60

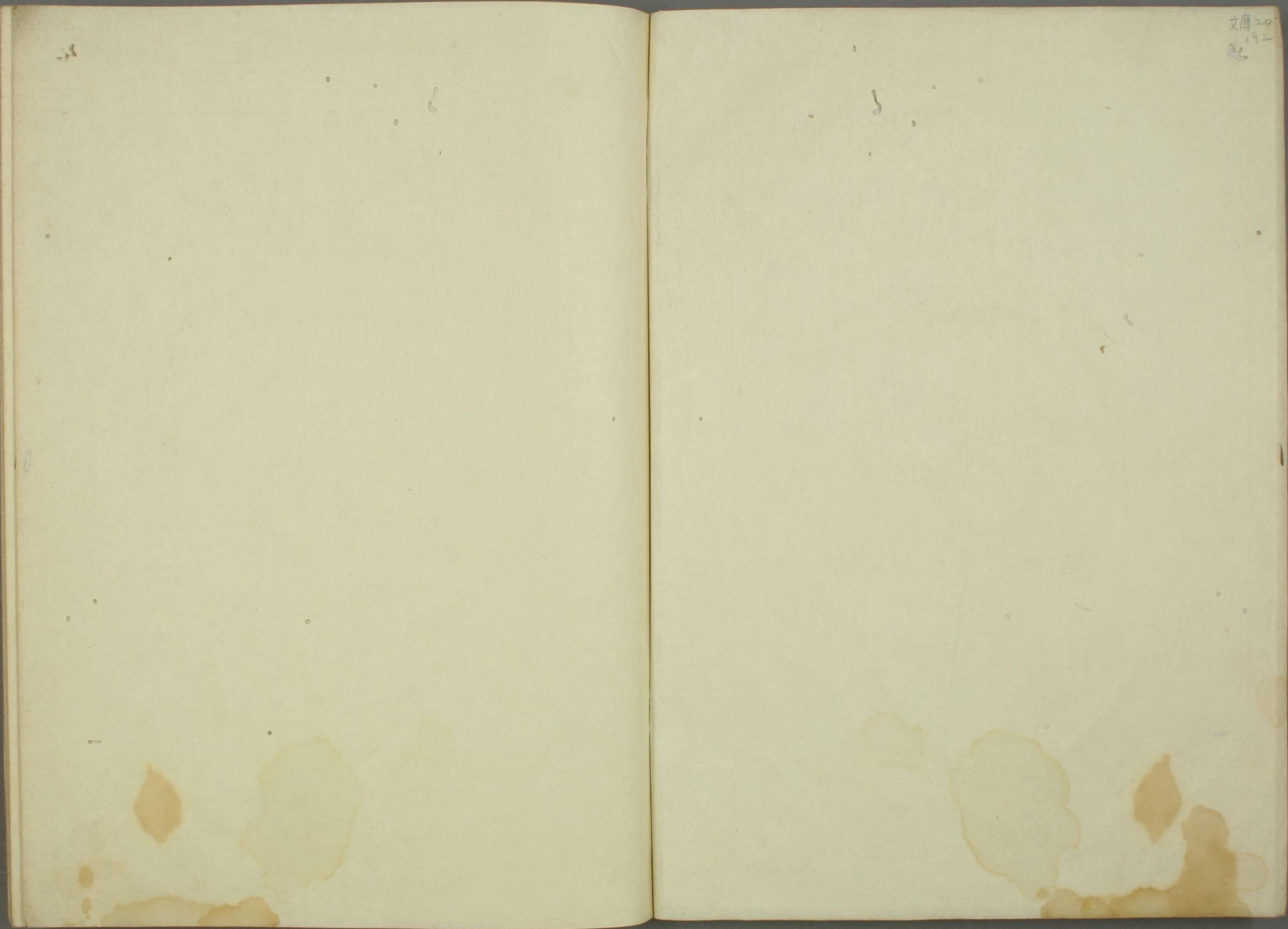
61 62 63 64 65 66 67 68 69 70

71 72 73 74 75 76 77 78 79 80

伊地知文庫  
文庫20  
192



文庫 20  
192  
26



連哥乃党性と並に布キ所やれ以一書易絵其趣  
人の取扱よも中半がされたりてある事も心にててを  
ハるかく併れとをもう先達乃ひひをへられ  
一五七〇とすもかちうりの事がえ全志す  
然へる次第、おどろすや何りとよ五へま事一  
サクルとか見おゆすつては是人の嘲をもるを  
一叢句ハ詫言を取とすましりゆうとあく「おの事  
可よむ時よもくふる事半人山血行乃  
山會あるとくまつづひも簡要ちくへーあらう半  
代可世あくいしてねれ心羽詫言ふお叶とあく又不  
吉のい羽をけせハ難有れどもとけくもは五  
とくへす中やる歎がたはーからく時節替歟  
院殿 号を碧 ち順法師をめて百韵を一に叢句

つままりうす中  
立派下りの胸  
日比十三

久の事は、  
世の事は、  
物の事は、

久々こゝより往い。是の事より、御當府の内  
直隸勝い。かくに至るを侍す是ホをひきとて、次安寧  
ちの辯也あ。かくもとじりて乞候あ。年と付候  
云ふうるもく。ひ晴の季よりか云う。や宗砌  
行はるへ。月夜のと朝也云。是ホを候  
云よお。又よ。候ふ。かくも。早  
て貴とし其の。至く他。一。を。あ。や。幸。肯。奉。を  
申。也。節。も。十七。り。か。く。し。す。夜。お。小。野。の人。

あすや春立初日のみ夜去  
秋乃野た十年の花乃ま古も  
え乃發るとあらわ  
せけ紫節邊うの半とゆ

水  
さく藤のいは氣ははの玉藻也  
葛の葉やうふアガサ向草  
是ホ、日のえんをひそめやう  
一服たりすいとくは足もとすまやうとゆくミト  
さあ、さうすがははやうつたうて發考の御幸  
御用一毛也

ひそかせひよの葉をひわくとまわす  
あく風や玉ねりふるえ  
物語じてむらよ戻上といひは  
ちづる長月照りふるえうい  
うきれの日もあづれ  
いあたうちよとすくわ針の宿

當府の内

ま暮乃うら、うち中垣

け二々て千々の内砌み会院也。うるをこはやし  
すゆくと松もくけよをドロヘキオキナリ

あく砌み会院也

秋をひけ神と友の朝原

け脈を泉

別は久思りうきかけにちくに日暮も経つ  
舍席立給てうけすれ、患院つよまくまは辛

扇乃、セヨヨシモタマムト

とハルノ

お當院慶義あり、御曳秋生裏と云す」さく當

あみのらゆアリオト

一束三勺半ソトと長ちく優吉は前勺に大やうよあ  
もけるふくおけん半簡要こ砌み独吟也

春けくあ小こむる雪氣る

ぬきふ風小梅うねくろ  
花すけたものまれ月をそひて とある方ニ  
眠白ふあくあして河岸へわすくあくへ船重

半載又

枝り玉ねく病乃へ、

とある方ニ

タモ乃離の葉秋、  
秋この閒情是正本ニ此神とそと砌み慶義

ヤエミモヒ立家肝のヨリ、シモ忍意の推量又と申  
ての本、秋このもよハ幾ふしてうしけのちすよく  
か但き、あよぢてハ力ちむすへ、とくもスヒ  
ちあるもあり、千々内宗用也

大は空く厚よそ舟

あにれおちる月、ワラニ夜よ

砌会院

一雨の夕未つよし安羽侵玄にきの夕乃さす、せむ  
やうよ元快あくまく人の付ふくこしすたつれせ  
つす近年秋ハクウの／＼乃るゝ或ハ葉の下アキハ  
リキアヒト云残す也。こづくも金云ナキテすとも  
面勺ヨハソトニヤモ近ハ面の夕れとくとく  
をうりてじ凡十匁メ後ハ半度くら  
二頃の事足とロウロマヤモトとて一ノ丸とノ人ノ付  
フキタ用ひ面の夕れー但十匁メ後ハ半度くら  
ミハマクハ面の夕れよハ似アヒニ又モ庭の衣ニあ  
て一頃をもやすつら中ノヤ但馬さ園次方の  
時ハモ足れ申シ月次の金替古の金もとにづく  
ムアラサニ又各う（モタタメテ申シ）トモ人  
羊仕キツシタマノ／＼の富ひとあ／＼けハヤクセ

角手事事マモレ灯唐エハ夕ハり難もありと壁  
をもれ事正ルといひ金言トモ傳ケルモヤ  
一古キトウツヘキカ否のキ人ヨモアヘキシモ常  
ニ付キヒトキハリカハリカハリカハリカハリカ  
ガ学あうとせよトアタク人歟人ノ付シチカニモ  
ニハキ本を不珍シレモトキハアヒテスア付シ  
、乞通シレハカシモイモシヤ我ヒヒ乃未練乃早  
モハ有レハキアヒト一氣モ解破トモヨハアヒテ  
てハ真アヒトモ子ヲ万匁の席ノテモ申シ度く  
乞通シトモハバ人の罪夕モ時あく付キテ  
ナシキナシトモハナシモ

一矢哥の四脚をも申并日集のまな一度度度  
ニカク否申一斗ヨミヤアのキモト類モシハツ

ひきとくはいふのをうけとて再びうるのをうけとて  
おもむかへりまことにあつたとて

と云ふ。まことに、

首に挂けたりうきつ。わがすひ  
卷は原氏の書は近修く  
手のしりよやうてゆまゝれもと清ら  
きよ角をまよめ着まく  
あに人の袖からとをまよつまくと  
是と原氏の内臣すじふひをいふ  
川や卷はうそりて仰かとちぢ  
主ぬと云ひ若者にすてしやとある  
けりや上手のちと是とえもく一又左の事

仰云の句は万韵の口へあきへある事多しれ、  
ふるまわる一すくは耳よき(かゆ)之位は宜  
いとぞ(せよ)

一源氏すましのひおやうのハモ類も一はしの事  
あがつら僕もほそえけすかふ不ニ相定も又噪てけ  
、すあへしの古事ちふと上手のちまく、幻たゞ  
えにぢりう和の、るふれ下手のタハ初ニ、  
とくせよ、般ほのぞまあれとくわくと  
そて、妄庶事中ちうく(ヤヒ)  
一源氏伊丸物種等入代集いつるを因有るゝ一はし  
の事、源氏ね説伊勢ね説わ事、事の事(キアリ)  
いづる及をす、代集乃中よ、古今集を入と在  
あせ、朝古じと集ちとをすとけすあり和奇よ

花と実もあり古今集ハ實新古今集ハ花ぢや  
而詮つてアルもあれトキ内トキ安モニ用也  
一尋合がこの想もんをちにましキシ乃半食食ハ計ハ  
の役とのねづり人もありトシ道者乃上テニ嫌事ハ  
あづるも但付合をトトクス沉思セハヤアホ東シテ  
軒元乃久ちうく

一千勺と百韵連まのひ乃半食食ハ差制本  
三千勺と千勺ハ極あいも化車るルハ行のを  
みつきぢりて更キヤ百韵連奇ハケヨハああいチ  
タヨハ似ギルをされよほく夕をトノムも  
（キ半）・・・但食食をトノムニ葉し財面ニとも  
うアリをうくうてて先とこモレバニル  
ヒヌヨウルニ面をすゞ・・・こももあつて事・・・あセ

ぬ勺もあらこ其面をありぬりと急乃ひらす  
めりとれど事へくもやセよせ云ハげ犯し  
一雪月花乃半月ハ歌ノ面無念事するノ前  
白夜もるゝにけるる夜うちるぬハ夜も月を  
付少すけり味方トキアリ半アリ水火共面に  
ノ月のるるすりゆのつじうたもめえトキモ  
ノ而ハくつまキスノ雪と花とハ百韵乃内三七四  
タの京物有らむに花・・・常・・・歌・・・歌・・・大か  
乃ひらすりすりものるハ一と有アヨモナカ  
持・・・持・・・持・・・持・・・持・・・持・・・持・・・持・  
ちりし・・・但下の匂がよしとあくとあると珍  
重のゆめり是ハだよしに不二限ト・・・サモロセ  
めれト前勺もひれ・・・其威も未半・・・其のゆき

一京わすれをくき乃キあひらぬ事このも  
えいせんにやのえひりおよ寄まくまく  
えあはやしゆそ國ありてん平勺をくちまく  
ムクウをもとむくすまくすまく

一癡述懷下教扶ホウキ本意の匂ハソトモヤ人  
をやりゆるうくー我命情你どりしまく今又  
ヨリ小とるどもと思、あわゑ候、くわくわしあれ  
たも人をじと中絶、うるさのハ意のや意よ  
あす又けほがまう候、す西行法師の事よ  
義とて人の心情あれ、あわゑみよがくめ歌を

達うよハ

くううくうるあよの橋

とまう宗福

人よのゆくやせうてくよ

是おもひ

トヘヌ

カキル人のことひひねよ恨みくめく被  
うきあと、我たうよくとくとくとくとくとくとく  
じ一音ハ癡乃おわく述懷也是をくくまくー又述懷  
夕小宵印志のりす

ト

隠家トリ人のようく花喰く

アリよく人りもせを、やねく  
ややせ頬、  
あさし述懷よ限日暮の匂まよさん匂不可  
然又考乃向四十歳乃以後も(辛と)そ小一年ま  
さる人のよきせすあひくろえすすと(但)のよ  
やうよりけしきくすとゆすと詔ありてくは  
至をむすむす

先をねアヘギ、れもあわせ

けいしり又朝定善年乃時  
極をさへ我もあひ花さだま と仕しを  
是ハ似答めとて又トキセチ順に内越モトシテ  
和亨ノ日高但老猿ある題をみてハ寔是摩津  
次下教のす

人の才とせぬ程ア老々 宝勅是化  
席名とよぶれとれ仙し 宝勅是化  
カを威乃起あれと自慢も勿よれをあて清宗の  
言はまづくセとつて連考み前の句もあく、ひ  
て老し角毛ニれ成本久但リちくとけしもお  
ハナ体よとく一 佛名題と清岩

五郎乃やよりのこうとをニ世の佛名を云  
もひりし三世乃仙のソルモト岩とくとくもあ

前ハ作者荀宗乃玄地じ後ハ化力とゆ是アロヘ  
一トハ小のみ事是一大半ハ御不調子トムヘレルト  
是ハタゞトテ是ハヨミトサキスムトト同モヒ  
キテ居候ハ物物とゆくとくにひる御子の内モお  
ふらえくとむた云候ハ主方納れおれと坐奉  
ひをアヘアリテ申ヘテもくつてと向し  
ノ既にあきこ吉よのアリめにハ因するりくみと  
上そく切るるハてとふどんを手すくすてあれも切  
り立御多とすてよとあハてれ小を落アーリ候今  
御ちくはりすやしておに候て 亂れや近  
ハれもとと文まことうれとおれもてよまくと  
花ちくはいたせんのあのとく そひづ  
や是しゆ文まゆへといけりのぬ事や

凡もトナルトロにテモトキナム

シタカア

人前乃類は書のセラシテヨリテ作リ是ハモトのを

至る及ハルニシテアラシ

序説乃事ナムトヘヨこの有ナリ

うに、ゆきゆきういをほくに

源家

ニ原人ち夜ハカキ別段ナリ

景石

又ソラムアリニシテシモト

墓作

是ホハヌミタクノ事シ

け在レニ、正母ナムトヨドキナリ

源家

日向又トウカサカ

喜乃年義を傳モトハム

源家

イ振ヒ砌ス書シテルカムアシナリ

源家

甲セ又

夕シテモキ秋の荒す

シナリテ数

モ乃トウニ仰シテリモニ又船の仕メ乃ト

源家

の写一テ迷シト侍

サクレヒシテ船のすまみ

シテキセメアシマハル

ミロク水ナリハシヤモ

源家

アル辟シ総レ類を數ナシモ人ありシナム

源家

一平勺に半クアシ乃半支モトカス下内日向

又初立文ナシテアシテモヤを油瓶やナシモ

テアシトヒシテアシテ、ナキ是シ半也若而ナシアラ

すてへ用心あら(ナキヤ)やたよ  
木下や月待花をありま  
友の野や原(カモ)よ地(チ)アリテ  
うこ次までにまよめのてとくわやけに  
かき柳先葉に宗祇乃勺(スコウ)をうす  
もそんわどくあや、生れらん。とあり枝  
白乳(シロミルク)あがまこすひそひあよ人(ヒト)も  
けやけり乃ハシムニカムハ善惡とヨルマ  
ヘキテヨム半ハ油タヨトウスニ鳴トケツ  
翁乃時独吟の十と人(ヒト)のを仰(アガマ)を暫時  
乃弓被見せに

うほの鐘ふとくわさあらん。是すれか  
きぬとハナとみゆきてまくらやいとす人モ

即能仕手といひう人の夕朝の音<sup>ノ</sup>アテ解  
ヌキより(キホ)二月キイヌ  
まひ侘ぬうる乃春の園おとしに  
いりん秋(ハフ)めぬれを元夜す  
はうた是も殊乃てよハ迷い侍(スル)一業者つ  
トあきりよハ不審此事セ但  
ト莫ト有し色うもね弱(ハラ)てけ  
て墓佑<sup>ノ</sup>計てふのとと陵谷(スル)一墓佑  
是佑乃返<sup>ノ</sup>幸<sup>ノ</sup>疫氣をすけずて居りされ  
て無度多とゆづるにや而往々多<sup>シ</sup>とひじ  
をしたるに至も即ちも五弱をうて  
さる也すとあらう者乃お司刑遠貞の種  
とゆれ茎一に是こそ足日ありすれど前のか害け

すてへ用心あくゞやせやたよ  
木下や月待花をありま  
友の野や涼き夜よ神ノリテ  
是ホハ振  
よし次までに金とめのてとてかやけに  
すヨリヤキ桶を棄じ宗祇乃勺をうす  
モトシんわとてあや、生れらん。とあり皮  
白有りあがまこもひそひあらよ人をい  
けやける而乃ハシムヌカふく善惡とヨルマ  
ヘテヨム半ハ油タヨトウスニ鳴トナツ  
翁乃時独吟の十とて人のを仰ぐを暫時  
乃弓被見セリに

つる室の鐘ふとアサヒアラ  
是すれか  
きぬとハサミムサシテムトモヤハシトサム人モ

即般仕手といふは人の夕朝の所にて解  
ヌキより(キキ)二月キイシ  
まひ侘ぬうる乃春の園おとしに  
ソリん秋のゆゑせよ元夜す  
ほうた是も殊乃てよハ迷い侍ア一業者つ  
トあきりや不審此事セ但  
トましも色うもね弱れてけりて  
ト墓佐<sup>シ</sup>計てふぞのと塚令ゆ。一墓佐  
是物乃返奉よ疫氣をかけずて居りされ  
て無度多とゆづるにや前達を多<sup>サ</sup>とひじ  
をしたるに至も却えど五弱をりて  
さむ也すとてあら<sup>サ</sup>者乃お司刑遠貞の禮  
とや院主<sup>シ</sup>は是こそ足日ありすれど前のか寒け

ほくひつゆうけむ

玉地もあさやかあととゑ純め

宵柏去

年とよし奉のむちありと有韵京都十家  
写本下著すにけぬきてみハニ思

門はたかむにあれあやめら

花うちわゆるや月の日暮れ

兼哉豪

穀舟といふしてよそ振ふるしあやめ草一叶  
わいふすすめるとあへよしわざくしや又お  
とまちにふとひきりありうととて故

こもるよしとひきりありたとて

花とれ色香西まへえ古之那

足ハ教

てとひきりとひきりとひきりとひきりとひ  
下ともとひきり色香西まへえ古之那

百のうへふく心をうへ又おだよてれをす

くねぬ

友山石元とひきり三とひきり

いひきり

一うあくひきりの半

玉札万紙とこよのうと

くもあくひきり

山越乃石がゆとたやま

源玄

田やまきあくひきり

人もむり人

宗頼

字かくらニまへうきこよとひ板ひさしこま  
勾組ひさしそとうきこよとひ板ひさしこま  
立字乃もあくひきりあくひきり人ひ板ひさ

こあくひきり人ひ板ひさしこま

やうすとくこはうていたとてたるは  
まみ乃一まみくとよろく是または三怪の人を  
の御墓松とひふ忠浅御のつひをへれあ  
れひを一冉として御よきを傳うそを盡  
ゆづれく判札をもへれき世間の布  
て件のけさをひび人情りむはまほにまう  
と云ヤシその中イ

今らも影乃友よきてまく

はまのやあまく山にまく

詰めとおせりこまのゆこ又しけの  
ちみふくれとしよめりに

朽木の板田の泥乃楊柳ら

はくくまをとよもと去

け夕

宗砌

まゝハつまや聖きのほくく  
け土草をあくぐニ應義乃向あけぬ防ぐ  
とあらがひしらぬのをふあにはくく  
とあひらやすや付にテ向乃あるをあい  
本えけぬけの函とむりえゆくをす  
みハ付すく傳用のゆる時とけり傳うそ  
五玄よハねや其故ハ精勾五句とさざれとく  
本をあはうこのもやうに人しまたあひや  
乃敷ひつひのうくきよや  
一原氏伊勢おは木半そのがよおうてつひも  
いたよ引あせんとくわ  
和寄みえれ題を、古き半をふくとのつみ其  
いをあはす半かのんと一奇合

坐後鶯戀

うつ蝶のころしをようともぬくとよゆ中の  
隔ハ忠能是ハ源氏わ極乃ハセモサシ事がありの  
まつへる日題も

引すりものものはすゝ縋スルにほすとあを  
カニ正被あり わ縁はあめさればよのううらむ  
シヒヌアリテキナヤヒトヘルのキガニマササ  
アヘヨツツカヤニルを以てちかへ一又

併夷恋

空蝶の取よをく蟲を落の葉に詰くふる葉を

そぞろ 情君是モ日め縁や 遠うす

えひひひこそおもとよもと

紙承

ゆづれの石をうち

二種もとあ

一めでうき羽再とうき付タキタキ羽再  
はく有難是一哥みと羽ハ如くのをあく  
ソソリ逃うしかむへすとくさせ合文歌  
くすすすすを嫌よいあに人のすきぬ羽の付  
よ二くしるをこのもとへに草をねを立夜  
えねゆくとまゆの善惡れ用折苦要くしき  
けくめくおもしらぬい法ぢれ とまゆ  
秋うきや風とあと羽うし  
宗和

云ハきのねうそ匂つひといけるるのうた  
さかくのよこかくをうそすまくしてあきいふるま  
かくすまくすまくすまくすまくすまくすまく

几きくすまくすまくのりうつ雲

よきやうる處の市にて  
松下のいがみめられテアリす

几をうきあく橋此若み  
船をひそかすむ跡や

以上砌石今聞さることを多く文字補遺や  
又松下のとつじタ石三つは自上村移すと云  
お前本屋しやうにむすロ情半也舟も  
夕ハ夙至一船とつるの計あくねまへひいな  
り匂し又ち頃付内ト

せにあくまとろをくす人

老乃後つてし道、あくま  
達込といへるてよをあくまといい形、又

一本のうきよすすも山内

大がえや萬葉の志城志筑もえ  
の唐みと云に文字を一あくけ放々山神みやと  
うね心よりちやうれしまる。てよをくわせ  
ほひの枕古乃為よほく

えす乃づはる岸の代

者柳や山もねよ乃翁ぬと  
前の句を放ちうそそれうちあきたやうこ  
まざすと

いきをちかへるう顧のち

ねのりくらしの跡す有

おりてたゞと云にねのりくらし月とつす寺也  
云せばのやーれるをえ乃寺と松乃りくらしと  
ひまぞ眼前の景氣也

京御

うれを原の島せすとされ  
所あすは田地稀に出門す

高泰

美衣女すよありてきるこ

モトミ君のもういまわざる

めらきぬはあよびもんに歌く

白の辞ねあらわよ感ふへりすいよと承  
わうと云のうくおけりや、仕よ肝いのけ石を呈

金子、オ

一詞、つちぬと白の辞とうき類乃事

うさねが我名ハトミ人ハニヒトモ

ツトキヌミラクゼ山

震れ後乃詞よけのく思乃津東乱うるかくあれ  
とくふうりてけ辞中く幽玄の心情毛ひやと

金の砌

とくふうりてけ辭中く幽玄の心情毛ひやと

あるく合点や此類ハ多テの事す自ら  
お未セしをさの三解釈する事にあらず  
け辞を以てくもあともとを、すら書き下る  
ゆりくも大抵是る紫もふむいては足取み及モサ  
取事もくしきに仕いとはすまき今きく  
され、音教もぬすずに收する又

ツリムノヘ、鞠もあらぐる

すかもやだのち信ひもの者

富類是

而云々ハ音乃と詠やれりあやすとくす  
うねりてうると傳きよやしと書く丘有  
此句ハ詞はきうちとくねハすけいとく古本  
を以てすくいひうつせ半もやけすくはとく  
一ガトもあらぬタのす

十

西山の御所より一坂を下る

けりよ乾

ニタ而云雖日日け匂いは一傍乃うする人の  
述懐乃やくふと併う凡人より不相立せり  
シトモ禁中の人花を我三つ名々とへます。

作れ因これをするとし伎手

やう乃

匂ひ方をあくづひますにさうも

花われんちをさう地乃々あゆまを

花の音

匂ひ方をあくづひますにさうも

花の音

花われんちをさう地乃々あゆまを

花の音

一走人共處よ活作の時進退の事并く都事多  
情一筆に生う人の氣色をの中に付す

詠事と見ハ紙我車と口よりぬと口より  
之す但事（詠事と口より東也すハ口より  
文す）あくづひの時ハ口をかくもとま人  
の口をかくねどもをあくづひ連れるの氣を口過  
る人ありまくづひの口へ口音を半て口作  
はきうよかくづひすけや扇ととくまく  
人の口をあくづひたとく半て口をかくす  
けう可ねい次句詠事（口音を人あり  
ある又ハ人よりくさを詠事人（かん或ハみん  
或ハヨロモ）毎社三句五句乃至七句八句其拂  
白敷（うき）て、歌形（うけい）りりく切者（きりきわ）と句裏  
を解釈せハ多百韵（ひきゆ）さやうく（うき）庄（やう）其の  
其の助者の役（うけ）て句裏奉（うけ）てまへまへ

をも居りキ、中や先人近事より數をも  
詔てたゞへ功者かと三勺し而句承すちや  
ヨリ既に至るま事や大略ハ先人ヨリい手す功  
志をもみれりて勺数より四三ハと勺とも其  
セ也但日次の令又ハ執事乃為ヤリム時日も  
ヨモルノリ一トされ候空より候す  
一仕事といふ事中よ人よまれぬ仕事もく  
仕ひすり平口ももよおつてハ待不及不承  
きのうくもくしのけひせハ仕よと致みてやあ  
况や西う仕ひすりあく待へき事もく  
是のうの乃りくもくやくノ一とて連元乃は  
ハらふすりぬをうな人おと一二と仕さむゆ  
事やうへき事をうなすてとうべり研破

乃物ノシキ事可半うく跡る事人  
の付えをし形をあくべりテ今後付乞ひ  
事トすに至ひるゝもあらん事大ゆ乃事  
トスノト  
一句をおたもひ事乃事うるまひま  
ニモヒ

已上

追加 二と付事乃事  
おほろの夜臘月夜ハ面白き泊シ小田  
サヘ、多きと川喜ハ四月、小雨、秋雨、夏  
多雨、いはりひさノ乃事

あくふ乃新送とて乃發々ごうすもも  
み箱ちよとこ

冬山 四季の中よりかかづね泊て但脚云々トナリ  
あるむき山とあり是しるにいそひへす  
（すとけまの匂ひ脚定てぢるアシ）

左明月 改定あらと巻ふと  
おりのと夕風はゆまに風  
物見るとこまるとえ原風とつと是ひやまくさ  
すされば不て候

右脚塵おし内かほくせまく多くあら異々  
一がちをさうに三勺よつてゆき  
立判いりまゆるの扇よめうもとさうしてくわ  
けうをれにくわまくれとつよいうみゆとけうるは

まつよしおはと、三勺よつて、まはうもく  
うすすいりも山よねうと、うす月をあ  
れくすけゆくやう、ぬきあはせよもや  
ひ一章一月とくくわづかじくすす  
一車秋をうりえす

我門よひむをゆや名よ呼る、今朝晴れも厚雲  
此ををむくは、るぢゆせゆ、我門厚雲と闇  
我門よ厚ハつて、キヨミヤハ

山ちのまよス音モテテ、入ひの境じたを教る  
け入金の境よ山ちしもの夕意してだのうす  
けや布き一首の中缺缺とく判してお酒を瓶  
一てよも一空うともちの心うるすもみやや醫者  
病よ依くまのか憾あらわれ、連寄と匂ふて

丁未の日於より

永正九年九月日

一再右京進氏長依而原書之

前守登守界新朝定在判

右一帖太田恒能別朝定以自筆訖車令写文訖  
然處一再右田恒加賀入道宗事山車者雲守  
歲朝不拘之召有本役合互相遠者也

天文廿一年秋生上句立秋接至脩前守高能

小川三左衛門尉風乞

天正二年三月日

八十一角乞脩前守高能模寫文訖

